

プリミエーロ出身の芸術家 リッカルド・シュヴァイツァー

私たちの郷土出身の有名なリッカルド・シュヴァイツァー（メツァアーノ 1925 - カゼツ 2004）の人物と作品を、地域、イタリア国内、国外のレベルで評価するための基本合意書が、トレント自治県、プリミエーロ山岳共同体、同地域の市町村、プリミエーロ峡谷およびヴァノイ峡谷農村金庫、サン・マルティーノ・ディ・カロツツァ/ロツレ峠/プリミエーロ観光局、市町村サービスのためのコンソーシアム会社の間で数ヶ月前に締結されました。

リッカルド・シュヴァイツァーはいろいろな種類の作品を残した芸術家でした。メツァアーノ・ディ・プリミエーロに生まれた彼は、若い頃からフレスコ画による壁画に取り組みました。それを物語るものがサンジョヴァンニ小教会内に1936年に描いた『聖母子』で、彼は何と11歳でした。

若いリッカルドはいろいろな事情から郷土の渓谷を去ることを余儀なくされ、イタリアの国内、そして国外で何度も移動することになりましたが、彼のプリミエーロへの愛着は変わることはありませんでした。まず、リッカルド・シュヴァイツァーはヴェネチアに居を移し、芸術学院で勉強し始めました。しかし、彼の好奇心はとどまるところを知らず、ついに、彼の生涯における大決心をすることになるのです。それはフランスへの移住でした。

1948年のヴェネチア・ビエンナーレ展覧会で、彼はピカソを発見します。この巨匠に直接に会って、そのインスピレーションとなっている同じ空気を吸い、イタリアのものとは違ってはるかに進んでいた、前衛的な世界に接触したいと思ったのでした。

リッカルド・シュヴァイツァーは、南仏のヴァロリスでシャガール、マティス、コクトー、プレヴェールに近づきます、この知識人、文化人の世界との接触によって、ありとあらゆる限りの刺激を受けたいと望んでいた若者は急速に成長したのでした。

彼の気質がそうさせたのか、周囲の環境の刺激を受けたのか、あるいはその両方が要因となったのか、リッカルド・シュヴァイツァーは360度にわたって活動するようになります。彼の活動は絵画だけにとどまらず、自己と世界を知る表現手段である限り、あらゆる表現形式に広がりました。

フランスに滞在すること4年、リッカルド・シュヴァイツァーはイタリアにもどってきます。そして、ヴェネチア芸術学院のブルーノ・サエッティの助手として働き始めました。彼はヴェネチアの前衛文化を担っていた人々を親しく交流するようになり、特に、ルイジ・ノノ、イゴール・ストラヴィンスキー、サルヴァトーレ・クワジモド、ペギー・グーゲンハイムを知りました。また、ヴェネチア大学建築学部のコモポリタンな環境とも接触し、彼の個人的

な世界発見に向けて新しい刺激を探索しました。

この頃、彼は陶芸、彫刻、フレスコ画、絵画の作品を制作します。これらの作品には、ピカソやシャガールの影響が見られるとともに、建築的構造や、後の彼の作品に見られる、建築、デザイン、絵画が統一された表現の力となり、2次元的な表現だけにはとどまりたくない彼の意志が感じられる構成を既に認めることができるのです。

リッカルド・シュヴァイツァーの完全な制作体験は1980年代にあったと考えることができるでしょう。

まず、フランスのニースの近くにあるカロスで建築家のフランソワ・ドリユエとともに、市庁舎の外壁の装飾のための共同作業をしました。また、1982年には、再びドリユエとともに、カンヌのフェスティバル・会議場ビルのための仕事をしました。この共同作業を通じて、リッカルド・シュヴァイツァーは、デザイナー、モザイク制作者、壁面装飾者へと変身しました。彼は、映画フェスティバル会場ビルの構造に合わせて芸術制作をおこない、幾何学模様や曲線を色彩やパイプの遊びと組み合わせたり、装飾素材を金属やアクリル樹脂とうまく組み合わせる手法を用いました。彼の才能の凄さが感じられるのは屋外スペースです。それは、クリスタルと金属パイプで造られたパピリオンが透明な花冠の形を構成するというもので、日中は白に、夜は青にライトアップされます。

このすばらしい経験からリッカルド・シュヴァイツァーは多くのことを学びました。そして、彼は新しい眼で世界を見るようになり、ある必要性もあって、さらに特に大きな面積を持つ、壁面の装飾画の活動に接近していきます。中でも、トレンティーノ県立トレント文化学校の新しい校舎や、モンテカルロのカプダージュ市庁舎の市長室と市議会室に、大フレスコ画を制作しました。

しかし、リッカルド・シュヴァイツァーの壁画の最大の傑作は、1990年代に故郷のプリミエーロ渓谷で制作した作品群だと言えます。シロル村では、『ハンカロンガの夢』と題された130平方メートルの美しく、巨大なフレスコ画を制作し、プリミエーロの人々の歴史をその起源から未来までを10個の時期に分けて描いています。プリミエーロ山岳共同体本部の建物では『カワウソと渓谷』というアクリル樹脂の作品を描き、公立プールのために『光、色、陽気』という150平方メートルの陶芸作品を制作しました。そして、最後に、メツァアーノ小学校の外壁に、『木は語る』という陶芸のインサートがあるアクリル樹脂により大壁画を残しています。



リッカルド・シュヴァイツァーの作品には、人生、出会いや、日常生活や出来事から生まれる感覚、感動、省察が語られています。それらは、強烈な色とコントラストで表現され、フォルムを囲み、その境界をたどり、要約する黒の線で押さえられているのです。これらは、計算が存在しない世界の理性的なビジョンであり、爆発するような、塗りつぶされた、深い意味を持つ色は、ただただ大きな感動を表現しようとしているのです。

リッカルド・シュヴァイツァーは、常に理性と感動という2つの対立の狭間にいました。彼の作品に時として矛盾が存在するのはこのためです。これらの矛盾は、人間自体、したがって、普通の人以上に感受性を持った芸術家シュヴァイツァー自身を構成するものであり、人生という、現実との対立を除外することはできないことから来るものなのです。このような二律背反的な態度は、不安定な知性として表れます。これは、弛まぬ探索をする肯定的な意味の不安定さであり、芸術家は、好奇心にあふれ、見つけたものに決して満足しなかったのです。

リッカルド・シュヴァイツァーは、このような重要な経歴

に満足していただろうと想像したいところですが、彼を実際に知っていた人の話ではそうではなかったということです。彼は性格上、疲れることを知らずに探索し続けました。誰を、何を探索していたのかは、おそらく、彼自身も知らなかっただろうといえます。なぜなら、彼は常に、弛まらずに自分を新しい経験にさらし、それまでのものをゼロにもどし、新しい知の冒険に旅立とうとしたからです。

GianAngelo Pistoia

ジャンアンジェロ・ピストイア

Concept & design: GianAngelo Pistoia

Photos: Archivio Eredi Schweizer –

GianAngelo Pistoia/A.P.

© GianAngelo Pistoia/A.P.

